

---

# 4ヶ月のノワール

さわたりかりん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

4ヶ月のノワール

### 【Nコード】

N2756L

### 【作者名】

さわたりかりん

### 【あらすじ】

世界中で少子化が深刻化し、人間は急激な人口減少に陥った。

小さな街にある屋敷には、女が一人で暮らしている。そこにある日突然、男性ロボットが訪ねてきた

## シホとの出逢い

そのロボットは突然私のところにやってきた。

「失礼を承知で参りました。どうか私をこの屋敷に置いていただけませんか。よろしく。」

そう、その日は雨の日だった。外は強い酸性雨で私は出掛ける気になれなかった。一日中私しかいない広い屋敷の中で暇を持て余しているつもりだった。しかし、昼過ぎの午後三時頃、玄関チャイムの鳴る音と共に彼がやってきた。

屋敷を訪ねて来たのは紺色の燕尾服を着た男性ロボットだった。彼は雨に打たれてびしょ濡れだった。

「何かご用かしら。」

「失礼を承知で参りました。どうか私をこの屋敷に置いていただけませんか。よろしく。」

ゆつくりと、はつきり話す彼が何のロボットかはすぐに想像がついた。

「あなた、お手伝いロボットね。でもどうしてこの家なの？」

「はい、実は昨日街で貴女様を見かけまして、それで貴女様のために働こうと決心しました。私が思うに、この街にはもう貴女様以外の人間はいらっしゃらないようなのです。」

私も最近この街で人間を見てはいない。ロボットが造られてから人間の少子化は深刻化し、今や人口が千人と密集している地域は世界中どこにもないだろう。ましてここは小さな街。ロボットで賑わっていても人間なんてほとんどいない。

「そうなの……あなた、ちゃんとメンテナンスはしてるの？壊れてないのかしら。」

「自己メンテナンスはしています。雨にあたりましたが、防水・防酸加工もしてあります。もしも故障した際は廃棄処分しても構いません。どうかこの屋敷に置いていただけませんかでしょう力。」

「あら、そう」

正直私は彼を置いても置かなくてもどちらでも良かった。ただ、ここで追い返した時に彼がまた雨にあたるのが、少し、可哀想だった。

「いいわ、置いてあげる。」

「本当ですか。ありがとうございます。」

「とにかく早く着替えてしまつてよ。」

彼を屋敷の中に招き入れ、一階のずっと使われてなかった男性の衣装部屋に連れて行った。

「ところであなた、名前はなんていうの？」

彼に着させる服を探しながらなんとなく聞いてみた。

「はい、NR0639と言います。」

「呼びづらいわね。何かいい呼び方はないかしら……あ、黒い燕尾服ならあったわ。」

彼に黒い燕尾服を着せた。古いが形はくずれていない燕尾服だった。思いの外、古くて黒い燕尾服がしっくりきていた。

「あなた黒い色の方が似合ってるわ。」

「ありがとうございます。では、これを着させていただきます。」

「そうだわ、名前も黒という意味のノワールでどうかしら。NR0639のNRもnoir<sup>ノワール</sup>に入っていることだし。」

「では、ご主人様がノワールとお呼びになった際には返事をするようにいたします。」

「ご主人様はやめて。私シホって言うの。」

「シホ様ですネ。かしこまりました。」

今日は一日中暇を持て余しているつもりでいたのが一変した。というよりも、一人きりで広い屋敷で暮らすようになってから今まで持て余していた暇が無くなったと思った。

とりあえずノワールを着替えさせたので、彼を私の部屋まで連れて行った。二階の一番目当たりの良い部屋が私の部屋だ。案内ついでに二階の突き当たりの空き部屋をノワールの部屋として使ってい

いと言っておいた。私は自分の部屋に入るなり、ベッドに倒れ込んだ。日頃の習慣のせいか、つい何でも怠けがちになっってしまう。

「お手伝いロボットって何でもやってくれるのかしら？」

「はい、お申しついただければ何でもいたします。」

「じゃあ私のパジャマに着替えさせて。もう眠るわ。」

「かしこまりました。」

入り口付近で直立していたノワールが向かってきた。

「やっぱり止めて。自分で着替えるわ。」

自分で言うっておきながら恥ずかしさがドツと湧き上がってきた。それと同時にノワールには冗談が通じないことが分かった。

「17時になりました。晩御飯は何にいたしますか？」

「えっ、あ、晩御飯ね……」

ノワールが突然晩御飯の話をしてきた。17時になると必ず晩御飯の準備に取りかかるよう設定されているようだ。

「今日は晩御飯いらないわ……」

「ダイエットですか。いけませんヨ、若い女性は健康的な食事を取らなくてハ。」

ノワールは口調を少し強めて言った。

「急に態度が変わったわね…。」

「シホ様の健康が第一ですか。しっかりと栄養を取らないとその美貌も維持できませんヨ。」

「あら、お世辞が上手なのね。いいわ。ただし、私の食事中は部屋に入らないでね。食事しているところを見られたくないの。」

「かしこまりました。」

この後ノワールは街へ買い出しに行き、帰って来るなり晩御飯を作った。晩御飯は温かいクリームシチューとハンバーグだった。家庭的なメニューでありながらもプロが作った料理のようだった。

「22時になりました。そろそろお休みになられた方がよろしいかと。」

またノワールのアラーム設定が出た。いつもならまだ夜更かししているが、今夜は突然うちに来た彼のために就寝準備を始めることにした。電気を消してベッドに入った私は、今日一日がとても楽しかったという気持ちになった。一人で暮らしていた時には感じられなかった感情だ。そして少し昔のことを思い出しかけて この屋敷で一緒に暮らしていたあの人のこと 眠りについた。

「シホ様、お休みなさい。」

ノワールの優しい声とドアがゆっくり閉まる音がした。

## 葛藤

シホ様の屋敷に置いていただいてから3ヶ月が経つた。最近のシホ様は少し様子がおかしい。やはり人間がいなければならないの力

今朝は寒さで目が覚めた。カーテンを開けると日が眩しいのに空気が冷えている。もうすぐ秋も終わりかとしみじみ考えながら、私はまたベッドに潜った。

「9時になりました。朝食のご用意ができています。」

「テーブルの上に置いていて…」

私はベッドから抜け出さなくなかった。

「かしこまりました。それでは私は洗濯をして参ります。」

「待つて。行かないで。」

私はノワールを必死で引き止めた。

「わかりました。ここにいます。」

「ねえ、何かお話してくれないかしら。そうね…感動的な話がいいわ。」

私は毛布にくるまっただまま、顔だけ出してノワールに話をねだった。

「わかりました。それでは私の昔の話をしましょう。……それは第三次世界大戦の直後のことでした。」

「ちょっと待って。第三次世界大戦が終わったのなんてもう百年近くも前の話じゃない。」

「はい、私もまだ新品同様でした。」

話の序盤から驚きだった。私はノワールが相当古いタイプのロボットだと知った。百年なんて、今こうしてノワールが正常に稼働しているのが奇跡なのではないかと疑うほど遠い気がした。私は不安に駆られた。いつかノワールを失う日が来るのではないかと

「戦争では多くの方が亡くなりました。私がいた地域はあまり襲撃を受けずに済んだのですが、空襲の際に私の住んでいた家のお嬢様が行方不明になってしまったのです。ご主人様は15歳だった一人娘を失って、それは悲しみに打ちひしがれておられました。」

「お嬢様は亡くなってしまったのかしら……」

「そこから二十年余りが過ぎたある日のことです。私は脚が不自由になったご主人様を車椅子に乗せ、街で買い物をしている時でした。後ろから声をかけられ振り返ってみると、そこにお嬢様が立っていました。」

私は妙だと思った。

「二十年も経ってよくそのお嬢様とわかったわね。」

「いいえ、厳密に言うへ行方不明になった当時の容姿のままの、15歳のお嬢様が立っていたのです。」

「変ね。」

「実はその人は、行方不明になったお嬢様の娘だったので。それは良く似ていました。」

「そう。お嬢様も生きていて会えたのね。」

「いいエ。」

「えっ」

「お嬢様は二年前に亡くなっておりましタ。空襲で体を病んでいたそうデス。そしてまだお嬢様が生きている時、お嬢様は娘に私の写真を見せておいたそうデス。父は老いて見分けがつかないかもしれないが、ロボットは顔が変わらないから、いつの日か娘が私に会えるようにト。」

何だか切ない気持ちになってしまった。自分で感動的な話を注文しておいてなんだが、ノワールのつらい過去に触れてしまい気が落ちた。

その日から私は少しおかしくなった。ノワールと生活してから3

ヶ月。私はノワールがそばにいてくれないと落ち着かなくなってしまう。不安に駆られるのだ。それからいつも私はノワールを欲していた。ノワールの昔話を聞いてから彼を失ってしまうのが物凄く恐ろしくなった。これはきつと愛なのかもしれない。寂しさからくる愛だとしても、私はロボットを好いてしまったのか。

私にはノワールが屋敷に来る少し前まで愛した人がいた。その人はもちろん人間で、この屋敷の持ち主でもあった。彼と出逢い、私も屋敷で暮らすようになり、毎日が二人の愛で満ち溢れた日々だった。出掛ける時はいつも二人一緒だったし、屋敷にいるときはずっと二人で抱き合っつて愛を確かめあっていた。

しかし、ある日彼は屋敷から姿を消した。財産も何もかも全部ここに置いて。私は彼の全てを包み込んであげられる存在ではなかったのだと悟った。彼の心のどこかに寂しさがあったのだろう。

私は彼を待ち続けた。一日中ずっと屋敷にいたことがほとんどだった。彼を失った寂しさが薄れ、一人の生活に慣れた矢先にノワールが来たのだった。きつと私は、私のいつも一緒に来てくれる人に愛を抱いてしまう癖があるだ。だから今ノワールを失いたくない。

「ノワール、愛しているわ。どこにも行かないでね。」

シホ様の屋敷に置いていたから3ヶ月が経つた。最近のシホ様は少し様子がおかしい。やはり人間がいなければならぬの力。シホ様は寂しかっているのさ。私がお側にいない時のシホ様が心配でならない。シホ様が私に愛を注がれるのは構わないが、私はその愛に応えることができない。そのようにプログラミングされているのだから。シホ様は、私などではなく、シホ様に相応しい人間

の男性に愛を注がれるべきなのだ。しかし、今そのような男性はいない。いない人間に期待できないのも事実だ。シホ様のために私のプログラムを書き換えるべきなの力。

これは、人間で言うところの葛藤というものかもしれない。いくら演算処理しても解決シ、ナ、イ

「19時になりました。食後のデザートにケーキと紅茶をお持ちイ、タ、シ、マ、シ、タ」

ぎこちなく喋ったと思った途端、ノワールは私の目の前で直立したまま動かなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2756/>

---

4ヶ月のノワール

2010年10月28日07時45分発行